

アピチャップン・ウィーラセタケン 亡霊たち

2016年12月13日(火)―2017年1月29日(日)
東京都写真美術館地下1階展示室

【作品リスト】

凡例

- ・作家、スカイ・ザ・バスハウス、鈴木朋幸氏により提供された資料および作家公式ウェブサイトの情報をもとに東京都写真美術館が編集した。
- ・作品は展示順に記した。
- ・作品情報は、以下の順に記載している。作品名、制作年、素材・媒体(写真の場合は技法)、時間(写真はイメージサイズ 縦×横 mm)、所蔵。
- ・所蔵記載のないものはすべて作家蔵。

アピチャップンのアーカイヴ

ホーム・ウェーチャコーン*による幽霊のドロウイング(プロジェクション)
ティーンエイジャーたちのドロウイング(「プリミティブ」プロジェクトより)
幽霊映画(『粉々になった地球』『幽霊の家』)

書籍・漫画

- *ホーム・ウェーチャコーン(1903/4-1969)は、タイの画家、イラストレーター。1930年代に出版社を設立し、幽霊読み物を自身の挿絵とともに出版し、アピチャップンをはじめとする多くのタイ・アーティストたちに影響を与えた。

悲しげな蒸気

2014
ライトボックス
昇華型熱転写方式
800 × 1200

ビデオ・シリーズ《花火(アーカイヴス)》の一環で制作されたライトボックス作品。ベッドに横たわるアピチャップンのパートナーが口から煙を吐き、花火の閃光に囲まれている。まるで宇宙のような空間となり、日常が覆い隠されている。被写体との親密さが読み取れ、同時に酩酊や夢の混在が見て取れる。

窓

1999
シングルチャンネル・ビデオ
SDデジタル、カラー、サイレント、11分56秒
東京都写真美術館蔵
初のビデオ・アート作品。カメラがとらえる映像を見ながら、自分の身体を少しずつ動かして即興的に撮影している。ビデオ・カメラとテレビモニタ、窓、それぞれの間で生じた光の動きを記録している。

ナブア森のティーン、2008年

2013
発色現像方式印画
588 × 900
東京都写真美術館蔵

ナブア森の犬と宇宙船、2008年

2013
発色現像方式印画
588 × 900
東京都写真美術館蔵

炎

2009
インクジェット・プリント
1470 × 2220
東京都写真美術館蔵

ゴースト・ティーン

2013
インクジェット・プリントを拡大して出力

4000 × 6040 (プリントサイズ1470 × 2220)

東京都写真美術館蔵(オリジナル・プリント)

8チャンネルのビデオ・インスタレーションに加え、短編映画、アート本、長編映画からなる「プリミティブ」プロジェクトと並行して撮られた写真作品群。「プリミティブ」プロジェクトでは、タイの東北地方のナブア村で、失われつつある村の記憶やイデオロギーを再考証するため、共産主義とされた農民の子孫にあたる村のティーンエイジャーを記録している。アピチャップンは、長編映画『ブンミおじさんの森』の構想段階で主人公の生い立ちを探ろうとラオス国境付近の村々を旅しているが、そのひとつがナブア村である。1960年代から1980年代初頭にかけて、共産主義の勢力拡大を恐れたタイ国軍が統治した村で、農民と激しい戦闘が繰り広げられた。当時、男性の多くは森の中へ逃げ、女性や子供たちだけが村に残った。偶然にも、男性を誘惑して、あの世へ連れ去ってゆく「未亡人の幽霊」という伝説が残る地域で、国軍との抗争で男性の姿が見当たらないナブア村は「未亡人の町」と呼ばれた過去がある。

ビデオ・ダイアリー：花火 スケッチ(蛙)

2014
シングルチャンネル・ビデオ
SDデジタル、カラー、ステレオ、1分54秒
短編映画や長編映画、ビデオ・インスタレーションとは別に小型カメラで撮影した「スケッチ&スタディ」作品。持ち歩いたカメラに記録したビデオ素材が年々蓄積され、その一部が最終的に作品へと昇華されることもある。一部の記録は、長編映画の『トロピカル・マラディ』や『ブンミおじさんの森』などのヒントになっている。

ビデオ・ダイアリー：トン

2004
シングルチャンネル・ビデオ
SDデジタル、カラー、サイレント、11分32秒
長編映画『トロピカル・マラディ』の調査で、スタッフのトンが記録した映像。アピチャップンが映画を撮る時は、常に関心を持った事象を徹底的に調査している。『トロピカル・マラディ』では、ケンクラチャンダムに駐屯する陸軍にトンが送り込まれ、兵士の生活や任務を調査している。トンが撮影したビデオが主人公の人物設定に役立てられた。

霊長類の記憶

2014
ライトボックス
昇華型熱転写方式
1000 × 1500

ミスター・エレクトリコ(レイ・ブラッドベリのために)

2014
ライトボックス
昇華型熱転写方式
1000 × 1500
《花火(アーカイヴス)》シリーズの一環で制作された一対のライトボックス作品。《霊長類の記憶》と《ミスター・エレクトリコ(レイ・ブラッドベリのために)》の二つの写真は、ネガポジの空間の探求ともいえる。閃光の瞬間がデジタルで彩色され、虚構の地形分布図をつくりだしているかのようである。近年、マサチューセッツ工科大学(MIT)で、光や色を使い人工的に脳の神経細胞を活性化する研究が発表されたが、本作はその研究に触発され制作された。《霊長類の記憶》は、少し前にタイの街頭で繰り広げられた政治闘争に呼応している。赤と黄色に色分けされた一派による暴力とドンチャン騒ぎの同時進行が、作品の原点となっている。《ミスター・エレクトリコ(レイ・ブラッドベリのために)》は、アピチャップンが愛する作家、レイ・ブラッドベリの記憶が表現されている。1932年、少年時代のブラッドベリは、5万ボルトの電流にも耐えられるサーカス団員「ミスター・エレクトリコ」に出会った。その男が言うには、14年前に彼の腕の中で死亡した友人の生まれ代わりこそ、ブラッドベリ少年なのだ。「永遠に生きなさい」と男にささやかれ、「永遠」がブラッドベリを創作に突き動かした。

父の診療所

2016
発色現像方式印画
210 × 290
2016年パリのトリー・ギャラリーにおける個展「火の庭」で発表された写真。アピチャップンの両親はタイ东北部イサーン地方のコーンケンで医者をしていたがその診療所は父親ともども作品の題材となることが多い。《父の診療所》はパリの「火の庭」展で、アピチャップン本人の世界観、彼が知る人々や場所、処女作で使用したカメラなどの仕事道具をとらえた写真とともに展示された。

ヴィデオ・ダイアリー： 父 2014 シングルチャンネル・ビデオ SDデジタル、カラー、サイレント、14分7秒 2003年頃、アピチャップンの兄が腎臓透析を受ける父親を撮影した映像。その記憶は鮮烈で、アピチャップンは後に長編映画『ブンミおじさんの森』の中で重要な役割を持って再現している。

0116643225059 1994 シングルチャンネル・ビデオ SDデジタル（オリジナルは16ミリフィルム）、白黒、本展ではサイレント（オリジナルはモノラル・サウンド）、5分19秒 初期の実験映画。シカゴ美術館付属シカゴ美術学校で映画制作の修士課程時代に制作された。コーンケンに住む愛する母に国際電話をかけ、その会話を録音している。母の子供の頃の写真にシカゴでアピチャップンが住むアパート周辺の映像をコラージュすることで、自身と家族、愛犬の強い絆を表現した。また、その記憶をカメラで記録したかのように、巧みに映像と音声を処理した作品である。

灰 2012 シングルチャンネル・ビデオ HDデジタル、カラー、ステレオ、21分48秒 東京都写真美術館蔵 オーストリアのカメラ会社「LOMO」及び、国際的な映画サイト「MUBI」との協働で生まれた作品。35ミリフィルムを手動で回す映画用カメラ「LomoKino」の発売に際して、アピチャップン版が限定生産された。そのカメラで撮影された素材も使い、アピチャップンの日常、仲間、愛する人、ペットらとの親密さが描かれている。失われてしまった記憶、タイ社会の暗部への眼差しも並置されているかのようだ。

ヴィデオ・ダイアリー： ハイク 2009 シングルチャンネル・ビデオ HDデジタル、カラー、本展ではサイレント（オリジナルはステレオ・サウンド）、1分58秒 ナブア村での記録ビデオ。「プリミティブ」プロジェクトが進む中、タイムマシンのセットで、魔法にかかったように眠る10代の少年たちを静かに撮影した。

故宮（ピピッタバン・ティ 台北） 2008 3チャンネル・ビデオ・インスタレーション（5チャンネル・ビデオ・インスタレーションより）、カラー、サイレント 台北の国立故宮博物院における「ディスクアヴァンring・ジ・アザー」展に出品した映像インスタレーション。博物館の空間と収蔵作品に共鳴するように制作したサイトスペシフィックな作品である。アピチャップンは、世紀を超えて存続する古代遺産や造形物であふれる博物館の精神性に着目し、展示空間をそんな時空の目撃者と位置付けた。その上で、彼は次のように語っている。「山々の中の広大な地下空間に隠れてしまった文化、言語、森、動物、宝物。すべてが無意味とした啓蒙時代へつき動かされても、その精神は生き延びていた。創造の精神だ。この展示空間を特殊な宇宙船としよう。その外には、かつて二匹の犬がいた。そして雨と呼ばれるものが降っていた。犬はいつも宇宙船の底やら翼の下で落ちてくる水を避けていた。今、まさに空が広がった……と言うより、空がなくなった。その精神が宇宙船を彷徨い、かつて経験したことのない記憶というものに浸る。飽きるまで浸る。」

花火（アーカイヴス） 2014 シングルチャンネル・ビデオ・インスタレーション HDデジタル、カラー、ドルビーデジタル5.1、6分40秒 《花火》シリーズ最初の作品。メキシコシティのクリマンズット・ギャラリーが初出となる。いつもの俳優たちを起用し、故郷の政治風土へ強い関心を寄せるアピチャップンだが、《花火（アーカイヴス）》には幻覚による記憶装置という役割を与えている。カメラがとらえるのは、ラオスとタイの国境にほど近い小さな町、ノンカーイのサラ・ケオ・クー寺院にある動物の彫刻である。その彫刻は寺院の開祖がつくったもので、空想や民話、さらには愛や生、教義や輪廻に関する仏教の教えを彼なりに解釈した政治の物語を描いていた。開祖は冷戦時代に共産主義者と告発され、ラオスに逃れていたこともあり、寺院に並ぶ土着の彫刻は、中央政府の抑圧や不当な扱いへの抵抗を示したものである。記憶とつなぎ合わせた本作は、ある種の親密さをもって出演者の体験を共有させてくれる。

サクダ（ルソー） 2012 シングルチャンネル・ビデオ HDデジタル、カラー、ステレオ、6分 フランスの哲学者、ジャン・ジャック・ルソーの百年祭記念で制作委託された作品。《サクダ（ルソー）》は、アピチャップン監督作の常連である俳優、サクダのポートレートといえる。メコン川の川岸で、わずかなコードを使いギターを弾くサクダが映っている。ルソーの作品に触発されたアピチャップンは、自分が生きる社会について思いをはせる。昔から帰属という概念に関心を持ち続けてきた。本作では哲学者ルソーの生まれ変わりに焦点があてられる。自分は記憶を持ち続けられるのだろうか、と疑問をもち、自分自身に問いかけている。「カメラにとらえられた声とイメージは、どこに帰属するのだろうか？ はたして当人のものなのだろうか?」

ヴィデオ・ダイアリー： 炎の庭 2016 シングルチャンネル・ビデオ SDデジタル、カラー、サイレント、1分53秒 2016年パリのトーリ・ギャラリーにおける「火の庭」展で発表した作品。《速度》を含む四つのビデオ作品と一緒に展示された。この展覧会の中核をなしたのが、のどかであり、恐ろしくもある自然で、その構成要素が火ということもあり、故郷の森より熱波を持ち込んだ感がある。アピチャップンは、自らの日常生活や想像の世界などの様々なイメージを多角的に使い、鑑賞者を自宅に招いたかのような親近感を演出した。

速度 2016 2チャンネル・ビデオ SDデジタル、カラー、本展ではサイレント（オリジナルはサウンド）、3分34秒／26秒（ループ） モンスーンの時期にチェンマイの自宅で撮影した作品。アピチャップンは、炎にも似たそのエネルギーに魅了された。暴風雨の前に吹く冷たいそよ風を想起させ、雨期のイオン粒子は人間の脳を活性化すると考えたりもする。本作の音をオンにすれば、燃え上がる畑や打ち寄せる波のようなサウンドが響くだろう。

亡霊 2013 シングルチャンネル・ビデオ SDデジタル、カラー、サイレント、1分56秒 本展のタイトル「亡霊たち（Ghosts in the Darkness）」は、2009年に発表した自身の論考タイトルに由来します。本展のキーワード、目に見えない**亡霊**=Ghostには二つの意味が潜んでいます。ひとつは写真や映像などのメディアを媒介することで作用する映像自体が持つ特性です。もうひとつは、現実社会で作用する目には見えない力、すなわち政治や歴史の中に潜むモンスターのような見えざる力のことです。

本展は、メディアの亡霊と政治の亡霊の二つを組み合わせることで、アピチャップンの深淵なる映像世界を理解する鍵となることでしよう。

記憶 アピチャップンの近作には、夢や眠りとともに「記憶」にまつわるエピソードがしばしば登場し、近年のテーマとなっています。「本展の作品には、初期作品から最新作にいたるまで、恋人や愛犬、両親、友人たちなど自分自身を取り巻く個人的なつながりが映し出されています。そこに特別な主題はないのですが、すべては自分の記憶なのです。それらは目に見えなかったり、見えたりする幽霊みたいなもので、決して形のあるものではなく常に変化しています」と、アピチャップンが語るように彼の作品の中で、記憶と物語は深く結びついています。

イサーン アピチャップンが育ったイサーンとは、タイ東北部の総称です。メコン川を挟み、ラオスとカンボジアにまたがるイサーン地方は、地理的にも歴史的にも、ラオスとカンボジアの文化の影響を受け、イサーン住民の多くは、タイ公用語とは異なるイサーン語を母語とし、タイ中央部とは異なる独自の文化を持っています。イサーンの人口はタイ王国総人口の約三分の一を占めるにもかかわらず、タイで最も貧困な地域とされ、いまだに中央のタイ人からの差別が存在します。アピチャップンは、故郷イサーンをあらためて理解するために、調査し、作品をつくりだすことで、その歴史を振り返ろうとしています。

20 YEAR ANNIVERSARY APICHATPONG WEERASETHAKUL GHOSTS IN THE DARKNESS

December 13, 2016 – January 29, 2017
B1F Exhibition Gallery
Tokyo Photographic Art Museum

[List of Works]

Notes

- Edited by Tokyo Photographic Art Museum, based on the documents provided by the artist, SCAI THE BATH HOUSE, Tokyo and Suzuki Tomo, as well as the information presented on the artist’s website. www.kickthemachine.com
- Works are listed in the order of the exhibition.
- Data on each work is provided in the following order; *title*, year of production; material/media (technique for photographs); duration (length × width mm for photographs); collection.
- All works not otherwise designated are by the artist.

Apichatpong’s archives Ghost drawings by Hem Vechakorn* (shown as a projection) © Barommakhroo Foundation Teenagers’ drawings (from *Primitive* project) Ghost films; *Pandin Wippayok*(Shattered Earth)/ *Baan Phi Pohp* (House of Pohp Ghost) Books and cartoons *Hem Vechakorn(1903/4-1969) was a Thai painter/illustrator. He started a publishing company in the 1930s and published numerous ghost stories with accompanying drawings, which inspired many Thai artists, such as Apichatpong.

The Vapour of Melancholy 2014 Light Box Dye sublimation 800 × 1200 Produced as part of the video series, *Fireworks (Archives)*, *The Vapour of Melancholy* depicts Apichatpong’s partner in bed. He’s caught releasing a smoke and is surrounded by exploding fireworks. A universe-like phenomena engulfs his body, concealing a mundane activity. This intimate portrait manifests a marriage of intoxication and dream.

Windows 1999 Single-channel video SD Digital, Colour, Silent, 11:56 min. Tokyo Photographic Art Museum *Windows* is the first work in video. It is an improvisation using a little physical movement to capture natural phenomena through the camera eye’s mechanism, occurring among the video camera, the television monitor, and the window.

Teen at Forest, Nabua, 2008 2013 Chromogenic print 588 × 900 Tokyo Photographic Art Museum

Spaceship with Dog, Nabua, 2008 2013 Chromogenic print 588 × 900 Tokyo Photographic Art Museum

The Fire 2009 Inkjet Print 1470 × 2220 Tokyo Photographic Art Museum

Ghost Teen 2013 Enlarged from the original inkjet print 4000 × 6040 (Original size 1470 × 2220) Tokyo Photographic Art Museum. (Original print) These works were produced in the occasion of *Primitive* project which includes 8 channel video installation, short films, a feature film and a book. The *Primitive* project is about re-imagining this little terrain of Thailand called Nabua, a place where memories and ideologies are extinct. *Primitive* project is a portrait of the teenage male descendants of the farmer communists, freed from the widow ghost’s empire. In the course of researching for a feature film, *Uncle Boonmee Who Can Recall His Past Lives*. Apichatpong Weerasethakul visited and worked in the north-east of Thailand close to the Laotian border. Among several villages he visited was the sleepy village of Nabua. It was one of

the places the Thai army occupied from the 60s to the early 80s in order to curb those who were accused of being communists. Nabua was the scene of fierce oppression, fighting and violence. Many people fled into the forest. Those that remained in the district were mainly the women and children. This reality echoed an ancient local legend about a ‘widow ghost’ who abducts any man who enters her empire. Thus in the legend, the district is devoid of men. Its nickname became ‘widow town.’

Video Diary: Fireworks Sketch (Frog) 2014 Single-channel video SD Digital, Colour, Stereo, 1:54 min. Apichatpong has produced a number shorts, feature films, and video installations. Over the years he has also made numerous video ‘sketches and studies’ with a tiny camera that he often carries around. Some of the videos featured here had ended up being reproduced or influenced in the works such as *Tropical Malady* and *Uncle Boonmee Who Can Recall His Past Lives*.

Video Diary: Ton 2004 Single-channel video, SD Digital, Colour, Silent, 11:32 min. Before Apichatpong makes his new feature films, he always conducts many researches related to the topic of his interest. For his film, *Tropical Malady*, Apichatpong sent his staff, Ton to visit the army in Kaeng Krajan Dam area, to study the lives of soldiers, and their daily routines. This is the video that Ton documented during his research trip, which later become the reference for the main character in *Tropical Malady*.

Primates’ Memories 2014 Light Box Dye sublimation 1000 × 1500

Mr. Electrico (For Ray Bradbury) 2014 Light Box Dye sublimation 1000 × 1500 This Light box series is part of the *Fireworks (Archives)*, the positive and negative spaces are explored in the two photographs, *Primates’ Memories* and *Mr. Electrico (For Ray Bradbury)*. The flashes of light were frozen and digitally painted, creating fictional topographies. The manipulation is inspired by the recent MIT molecular research in which light and colour are used to artificially activate a memory. *Primates’ Memory* echoes the current colour-coded conflict in Thailand’s streets where violence and revelry coexist.

Mr. Electrico (For Ray Bradbury) is drawn from Apichatpong’s favourite writer’s memory. In 1932, a young Ray Bradbury met with a circus performer Mr. Electrico who could endure fifty thousand volts of electricity. The man claimed that Ray was a reincarnation of his friend who died in his arms fourteen years earlier. “Live Forever,” the man whispered to Ray and forever became the author’s driving force.

Father’s Clinic 2016 Chromogenic print 210 × 290 Apichatpong whose parents were doctors, was grew up in Khon Kaen, a city in Issan, the north-eastern region Thailand. His father and his clinic were sometimes featured in his works. This work was exhibited for Apichatpong’s solo show, “Fire Garden” at Torri Gallery in Paris in 2016 as one of a selection of photographs which evoke the private world of the artist, people and the places he knows, and even some of his working tools, like the cameras he used in his first movies.

Video Diary: Father 2014 Single-channel video, SD Digital, Colour, Silent, 14:07 min. In this *Video Diary: Father*, was shot in around 2003 by his brother when his father had undergone the kidney dialysis. This moment was stuck in his memory, and it recurred in one of the important scene of his feature film, *Uncle Boonmee Who Can Recall His Past Lives*.

0116643225059 1994 Single-channel video, SD Digital (Originally 16mm film), B&W, Silent for the exhibition (Originally Mono), 5:19 min. This is an early experimental film by Apichatpong and was made during his MFA (Filmmaking) studies at the School of the Art Institute of Chicago. It’s about a long distance telephone conversation between the filmmaker and his beloved mother in Khon Kaen, Apichatpong collaged a photograph of his mother in her youth with his apartment in Chicago. It rendered a strong bonding between the artist, his family and his dog. At the same time, he manipulated the images and sounds as if he would like the camera to record the memory.

Ashes

2012
Single-channel video
HD Digital, Colour, Stereo, 21:48 min.
Tokyo Photographic Art Museum

Apichatpong worked with Lomo, an Austrian camera company, in collaboration with Mubi, a global film website, for the launch of Lomokino, a portable motion picture camera. Lomo introduced the camera's 'Apichatpong' edition. *Ashes* is about the intimacy of his daily routine, circles of friends, lover, pets, and juxtaposed with the destruction of memories and his observation of the dark side of Thailand's social realities.

Video Diary: Haiku

2009
Single-channel video
HD Digital, Colour, Silent for the exhibition (Originally Stereo), 1:58 min.
In this video, Apichatpong documented the time machine set during the making of *Primitive* project in Nabua, while the teenagers were hypnotized and slept inside.

The Palace (Pipittapan Tee Taipei)

2008
3-channel video installation
(selected from 5-channel video installation), Colour, Silent
This is a site specific project that Apichatpong created in response to the collection and the space as part of the exhibition, *Discovering the Other*, at the National Palace Museum in Taipei, Taiwan. He explored the spiritual elements of the art institution which filled with ancient objects and artifacts run through centuries. The artist saw the room in the museum as the witness of time and space. The artist wrote, "The cultures, the languages, the forests, the animals, the treasures hidden in the vast tunnels inside the mountains. We are then forced to move to the Age of Enlightenment when nothing is meaningful. But the spirits remain, the spirits of the artifacts. At this particular spaceship, outside there used to be two dogs. And it used to be something called the rain. The dogs were always under the spaceship's canopies and wings, sheltering themselves from the falling water. Now when the sky was empty because there was no sky, their spirits roamed the ship. They immersed themselves in the memories they hadn't experienced, until they got bored."

Fireworks (Archives)

2014
Single-channel video installation
HD Digital, Colour, Dolby 5.1, 6:40 min.
Apichatpong continued to collaborate with his main actors in showing his deep interest in the political remnants of his native region. The piece exhibited at Kurimanzutto in Mexico City was the first in the series. *Fireworks (Archives)*, functioned as a hallucinatory memory machine. It catalogs the animal sculptures at a temple at Wat Koo Kaew, Nong Khai, a small town on the border of Laos and Thailand. The founder of this temple created status based on fantasy, folk tales, as well political myth to unravel his belief in Buddhist teachings about love and live, as well as myth and reincarnation. He was accused of being a communist during the cold war period and sought exile in Laos. Oppressed by the centre, and treated unfairly, the vernacular sculpture shows the signs of resistance. Filmed in the collage of memories and archives. The film invites us to be part of the actors' experiences in a very intimate way.

Sakda (Rousseau)

2012
Single-channel video
HD Digital, Colour, Stereo, 6 min.
Apichatpong was commissioned to create work to commemorate a centennial of a French philosopher, Jean Jaques Rousseau. *Sakda (Rousseau)* is a portrait of his leading actor, Sakda accompanied by a few guitar chords on the bank of the Mekong River. The artist was inspired by the works of Rousseau to reflect on the society in which he lives. He has always been interested in its ideas of belonging and the relation of the philosopher who doesn't know if he will manage to keep his memory and is asking himself, "One his voice and his image have been captured by the camera, whom do they belong to? Is he the owner?"

Video Diary: Fire Garden

2016
Single-channel video
SD Digital, Colour, Silent, 1:53 min.
This video work was exhibited at Torri Gallery in Paris in 2016 with four other pieces including *Velocity*. Nature – both idyllic and threatening – along with elements like fire, were at the centre of the exhibition. Apichatpong tried to bring the intimacy at home to show the different images of the layers from his daily life, fantasy etc. In *Fire Garden*, which was the title of the exhibition shows a wave of heat from the jungle at his home.

Velocity

2016
Double-channel video
SD Digital, Colour, Silent for the exhibition (Originally shown with sound), 3:34 min./26 sec.loop
The piece was shot at Apichatpong's house in Chiang Mai during the monsoon season. Its energy like the fire attracted the artist. It would exude multiple recollection of a cool breeze before the rain and destruction. He also feels the ion

particles in the air in the rainy season activate the brain function of people. The sound of the piece, if it is on, would be actually like a burning field, or the sea waves on the beach.

[Keywords for Getting to Know Apichatpong]

Ghosts

The title of this exhibition, "Ghosts in the Darkness," is taken from the title of Apichatpong's own essay published in 2009. The keyword, ghosts, alludes to two things: firstly, the particular nature of moving images and their effect when transmitted through media such as photographs and videos; secondly, invisible forces acting in the real world, namely the monstrous powers that are latent in politics and history. By examining in parallel these two types of ghosts – ghosts of the medium and ghosts of politics – this exhibition will provide visitors a key with which to understand Apichatpong's profound visual world.

Memories

Apichatpong's recent works often feature, alongside the themes of dreams and sleep, episodes involving the theme of memories. "For me," says Apichatpong, "the works in this exhibition – from the very early works to the most recent – all reflect personal images that have surrounded me: love, animals, parents, friends and so on. It's not about any particular subject, but it's my memory. And for me, a memory is like a ghost in the way it keeps transforming, sometimes appearing, sometimes disappearing. What I am trying to say is that memory is not solid." In Apichatpong's works, memories and stories are inextricably linked.

Isan

Isan is the northeast region of Thailand where Apichatpong grew up. Neighbored by Cambodia and Laos across the Mekong River, Isan has been historically and geographically influenced by Laotian and Cambodian cultures. Most people there speak the Isan language, which is different from Thai, as their mother tongue, and have their own culture that is distinct from that of central Thailand. Although the population of Isan comprises approximately a third of the total population of Thailand, Isan is regarded as the poorest region in Thailand, and is subject to prejudice from people in central Thailand even today. Apichatpong researches and creates works based on Isan, looking back at its history, in an attempt to gain a new understanding of his homeland.

